

文章を読み比べる①

選択肢

◇次の【文章Ⅰ】は『今昔物語集』に収められている説話である。【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】を踏まえて書かれた近代の小説の一部分である。これらを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。

【文章Ⅰ】(羅城門の上層うはしに登りて死人を見たる盗人のこと(巻第二十九 第十八))

今は昔、**撰津の国**のわたりより、盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ明かりければ、**羅城門**の下に立ち隠れて立てりけるに、**朱雀**の方に人しげく行きければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、**山城**の方より人どものあまた来たる音のしければ、「それに見えじ。」と思ひて、門の上層にやはらかかぶり登りたりけるに、見れば火ほのかにともしたり。盗人、「あやし。」と思ひて連子れんじよりのぞきければ、若き女の死にて臥したるあり。その枕上まくらがみに火をともして、年いみじく老いたる**姫**の白髪白きが、その死人の枕上まくらがみにあて、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

盗人これを見るに、心も得ねば、「これはもし鬼にやあらむ。」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある、脅して試みむ。」と思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、「己おのれは、己おのれは。」と言ひて、走り寄りければ、**姫**、手惑ひをして手をすりて惑へば盗人、「こは何ぞの**姫**の、かくはしるたるぞ。」と問ひければ、**姫**、「己おのれが主あるじにておはしましつる人の失せ給へるを、あつかふ人のなければ、かくて置き奉りたるなり。その御髪みげの丈に余りて長ければ、それを抜き取りて鬢かづらにせむとて抜くなり。助け給へ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣きぬと、**姫**の着たる衣きぬと、抜き取りてある髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

さて、その上の層こしには死人の骸骨ぞ多かりける。死しにたる人の葬はなむりなどえせぬをば、この門の上うへにぞ置きける。このことは、その盗人の人に語りけるを聞き継ぎて、かく語り伝へたとや。

《注》

◆撰津の国 今の兵庫県東部と大阪府の北部。

◆山城 今の京都府の南部。

◆見えじ 見られまい。

◆やはらかかぶり登りたりけるに そつとよじ登ったが。

◆連子 窓に細い木や竹を並べて取り付けたもの。

◆心も得ねば 納得がいかないのです。

◆己 おまえ。

◆手惑ひをして手をすりて 慌てふためいているしぐさ。

◆あつかふ人 世話をする人。

◆丈に余りて長ければ 背丈よりも長いので。

【文章Ⅱ】

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子のしらみをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。——いや、この老婆に対すると言つては、語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢え死にするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、恐らく下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がりだしたのである。下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれにかたづけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけで既に許すべからざる悪であった。もちろん、下人は、さつきまで、自分が、盗人になる気であったことなどは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは言うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人を突きのけて行くこうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちょうど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色を、その目の前へ突きつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、目を、眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように執拗く黙っている。これを見ると、下人ははじめて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下ろしながら、少し声をやわらげてこう言った。

「俺は検非違使の庁の役人などではない。今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからおまえに縄をかけて、どうしよ

うというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのだから、それを俺に話さなければいいのだ。」
 すると、老婆は、見開いていた目を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなった、肉食鳥のよ
 うな、鋭い目で見たのである。それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でもかんでいるように、動かした。
 細い喉で、とがった喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝
 わってきた。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑といっしよに、
 心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方も通じたのである。老婆は、片手に、まだ死骸の頭からとった長い抜け毛を
 持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのく
 らいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したの
 を、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいたことである。それ
 もよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず材料に買っていたそう。わしは、この女のしたこと
 が悪いとは思っていぬ。せねば、飢え死にするのじゃやて、しかたがなくなることである。されば、今また、わしのしていたこと
 も悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にするじゃやて、しかたがなくなることじゃわいの。じゃやて、その
 しかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであらう。」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手で
 は、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、
 ある勇気が生まれてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上が
 って、この老婆を捕らえた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、飢え死にするか盗人になるか
 に、迷わなかったばかりではない。その時の、この男の心持ちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさ
 えできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をきびから離して、老婆
 の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、俺が引剥ぎをしようと思ひまいな。俺もそうしなければ、飢え死にする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしご
 の口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急なはしごを
 夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆
 は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口まで、はっていった。そうし
 て、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

問1 【文章Ⅰ】の傍線部①～③の解釈として最も適当なものを、次の各群のA～オのうちから、それぞれ一つずつ選べ。

- ① 人どものあまた来たたる音のしければ
 - A ある人がさわぎながらやって来る音がしたので
 - イ もし人が急いでこちらへ来る音がしたなら
 - ウ 何人かの人がこちらに来る音がしたので
 - エ 人がたくさんやって来る音がしたので
 - オ もし多くの人がやって来る音がしたなら
- ② 己が主にておはしましつる人
 - A 私が主人としてお仕えしていた人
 - イ 私が主人となって使うはずだった人
 - ウ 私が主人となって使っていた人
 - エ 私の主人になるはずだった人
 - オ 私の主人でいらつしやった人
- ③ 死にたる人の葬りなどえせぬをば
 - A 死んでしまった人で葬儀などすることのできない人を
 - イ 死にかけている人が葬儀をすることなどできないので
 - ウ 死んでしまった人が葬儀など期待することもないので
 - エ 死にかけている人で葬儀などをするとするという予定のない人を
 - オ 死んでしまった人で葬儀など期待することもなかった人を

問2 【文章Ⅱ】は『羅生門』という小説の一部である。この小説の作者の作品として適当なものを、次のA～オのうちから一つ選べ。

- A 『破戒』『夜明け前』
- イ 『刺青』『細雪』
- ウ 『河童』『齒車』
- エ 『蟹工船』『党生活者』
- オ 『雪国』『千羽鶴』

問3

【文章Ⅱ】から読み取れる「下人」の心理の変化を説明したものと最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。
 ア 初めに感じていた恐怖と好奇心はやがて悪に対する反感へと変化し、老婆を懲らしめてやろうという勇気を生み出した。しかし、老婆の話を聞いた後はその境遇に共感し、勇気の方向が間違っていたことに気づいた。

イ 初めに感じていた好奇心はすぐに恐怖に変わり、やがて悪に対する強い憎悪を生み出した。だが、老婆を捕らえ、その話を聞くうちに、老婆の境遇に対する共感が心に生じて、二つの異なる勇気を感じるに至った。

ウ 初めに感じていた恐怖と好奇心はやがて悪に対する反感と憎悪に変わり、老婆を捕らえようとする勇気を生み出した。しかし、その後、老婆の話を聞くうちに、反感や憎悪は消え、全く別の新しい勇気を感じるに至った。

エ 初めは軽い恐怖と好奇心しか感じていなかったが、老婆が何をしているかを知ると、悪に対する憎悪に支配され、老婆を捕らえる勇気が湧いてきた。そして、老婆の話を聞くうちに、その勇気はさらに強くなった。

オ 初めに感じていた恐怖と好奇心は、老婆の行為を見ているうちに消えて、悪を憎む強い勇気が湧いてきた。そして、老婆を捕らえて話を聞いた後は、老婆への共感や同情も加わって、その勇気は以前より幅広いものとなった。

問4

【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】について述べたものとして適当でないものを、次のア～オのうちから一つ選べ。
 ア 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、話の筋は似ているが、死体となっている女とその髪を抜く嫗（老婆）との関係が全く異なるなど、相違点も多くみられる。

イ 【文章Ⅰ】で嫗（老婆）は自分の行動の理由のみを語っているのに対して、【文章Ⅱ】では自分の人生観、つまり生きることについての考えも語っている。

ウ 【文章Ⅱ】では老婆から服を奪い取る理由が下人の口から説明されているのに対して、【文章Ⅰ】ではその理由は全く説明されていない。

エ 【文章Ⅰ】では盗人（下人）の視点から嫗（老婆）の視点へと変化しているところがあるが、【文章Ⅱ】では一貫して下人の視点から語られている。

オ 【文章Ⅱ】では嫗（老婆）の様子が印象的な比喻表現などを用いて細かく描写されているが、【文章Ⅰ】ではごく簡単にしか描写されていない。

問5

三人の人物が【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】における下人の人物像の違いについて討論した。次は、その【三人の人物による討論の一部】である。これを読んで、後の問い（i・ii）に答えよ。

【三人の人物による討論の一部】

Aさん 【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】では、男（下人）の人物像が大きく異なると思いませんか。

Bさん 【文章Ⅰ】の男（下人）は、非常に「A」として描かれていますね。【文章Ⅰ】の一文目にある「盗みせむがために京に上りける男」などからもそのように思いました。

Cさん ええ。それに対して【文章Ⅱ】の下人は、心の在り様の変わりやすい、いわば「迷える人」として設定されていると思いませんか。

Aさん でも、最終的には【文章Ⅱ】でも下人は盗賊になってしまいますよね。この点において【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の下人に違いはあると思いますか。

Bさん 【文章Ⅰ】は最初から下人自らの意志によるものだと思いますが、【文章Ⅱ】は違うと思います。

Cさん 私もそう思います。【文章Ⅱ】では下人が最終的に盗賊になったきっかけが老婆の言葉にあった点に注目したいですね。つまり下人は、Bわけです。

i 【三人の人物による討論の一部】の空欄Aに入る語句として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 慈しみの心にあふれた人 イ 判断力に長けた人 ウ 自己中心的な人

エ 追い詰められた人 オ 融通の利かない人

ii 【三人の人物による討論の一部】の空欄Bに入る語句として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 生きるためには悪も許されるという老婆の論理に反発して、全く異なる理由から盗賊になった

イ 生きるためには悪も許されるといふ老婆の論理を応用して、自己のエゴイズムを正当化した

ウ 生きるためには恥をしのばねばならぬという老婆の論理に屈して、自己のエゴイズムを無視した

エ 生きるためには悪も許されるといふ老婆の論理に反発して、自分は正しい盗賊であろうとした

オ 生きるためには恥をしのばねばならぬという老婆の論理に納得して、自分も盗賊となった

問5	問4	問3	問2	問1
i				①
ii				②
				③

文章を読み比べる①

年
組
番

氏名

評点

--

.....

解答解説

文章を読み比べる① (50点)

問1 ①Ⅱエ ②Ⅱオ ③Ⅱア (各5点—15点)

解説

- ① 「人ども」の「ども」は複数であることを表す接尾語。「あまた」の意味は「たくさん」。「ければ」は、助動詞「けり」の已然形に接続助詞の「ば」が付いたもので、順接確定条件を表す。ここでは「(し)たので」と訳す。
- ② 「己が主」の「が」は連体修飾格。よって「己が主」は「私の主人」と訳す。「おはしまし」は、「あり」の尊敬語「おはします」の連用形。「おはします」は「いらつしやる」と訳す。
- ③ 「死にたる人の」の「たる」は完了の助動詞。「の」は同格で「で」と訳す。「えせぬ」は、副詞「え」にサ変動詞「す」の未然形「せ」、打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」が付いたもの。「えく打消」で不可能を表す。よって「えせぬ」は「することができない」と訳す。

問2 ウ (5点)

解説

『羅生門』の作者は、芥川龍之介である。大正時代を代表する小説家で、菊池寛・久米正雄らと共に雑誌『新思潮』(第四次)を創刊し、新思潮派と呼ばれた。(新思潮派は、広津和郎らの新早稲田派とまとめて新現実主義とも呼ばれる。)代表作に『鼻』『羅生門』『河童』『歯車』などがある。よってウが正解。アは島崎藤村、イは谷崎潤一郎、エは小林多喜二、オは川端康成の代表作である。

問3 ウ (7点)

解説

- 【文章Ⅱ】の中で表現された「下人」の心理描写を追っていくと、次のようになる。
- ・(老婆の行動を見始めたとき)「六分の恐怖と四分の好奇心」
 - ・「恐怖が少しずつ消えていった」
 - ・「激しい憎悪」「あらゆる悪に対する反感(悪を憎む心)」
 - ・(老婆を捕らえて)「安らかな得意と満足」
 - ・(老婆の話聞いて)「ある勇気が生まれてきた(＝老婆を捕らえた時の勇気とは、全然、反対の方向に動こうとする勇気)」
- この流れを押さえているウが正解である。

問4 エ (7点)

解説

「適当でないもの」を選ぶ問題である点に注意する。【文章Ⅰ】の冒頭から「……下り走りて逃げて去りにけり。」までは「盗人(男)」の立場から描かれている。「嫗(老婆)」の視点から描かれている部分はない。また最後の「さて、その上の……かく語り伝へたるとや。」は語り手(作者)の視点から描かれていると見るべきである。

【文章Ⅱ】は冒頭から「……またたく間に急なはしごを夜の底へかけ下りた。」までは、「下人」の立場から描かれており、その後の「しばらく、死んだように……」以降は「老婆」の立場から描かれている。以上から、「適当でない」選択肢はエである。

問5 iⅡウ (8点)

解説

空欄Aの後に続く「それに対して【文章Ⅱ】の下人は、心の在り様の変わりやすい、いわば『迷える人』として設定されている」というCさんの言葉に着目する。【文章Ⅰ】の下人は【文章Ⅱ】の「迷える人」と対照的であること、また盗みをするために京にきた男であることから、非常に自己中心的な人物、エゴイスタイックな人物として描かれていると推測できる。したがって、ウが正解。

iiⅡイ (8点)

解説

【文章Ⅱ】に「飢え死にをするか盗人になるか」という問題を、改めて持ち出したら、恐らく下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。」とあり、それまでの「下人」は、「飢え死にをするか盗人になるか」という問題「について思い迷っていたのである。その後「下人」は、いったんは「あらゆる悪に対する反感」を強く感じたものの、老婆の話聞いた後はさらに考えを改め、盗賊へと変貌した。それは、「されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃや、しかたがなくすることじゃわいの。」という老婆の論理をそのまま自分に応用して、「では、俺が引剥ぎをしようと恨むまいな。俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」と自己のエゴイズム、すなわち他人を犠牲にしても自分が生きていければよいという自己中心性を正当化したためである。以上から、イが最も適当だと判断できる。